

両刃交鋒不須避

好手還同火裡蓮

宛然自有<sup>注1</sup>冲天氣

草津高等学校

りょうじんほこをまじえて さくるを もちいず

両刃鋒を交えて 避くるを須いず

こうしゅかえって かりの はすにおなじ

好手還って 火裡の蓮に同じ

えんぜんおのずから ちゅうてんのきあり

宛然自ずから 冲天の氣有り

草津高等学校の部旗には漢字二十一文字が力強く書かれています。これは、中国唐王朝の後半に登場し、曹洞宗という禅宗の流れを確立した洞山良价和尚（807～869）が坐禅修行で到達した境地を、論理的に七言の詩で表現したものです。（注2五位頌 兼中至）

「両刃の注3鋒を切り結んでいる武人は、相手をかかわしたりすることはない。このような鋒の使い手は、燃えさかっている炎の蔭で涼しげに咲いている蓮の花のようで、まるで天に突き入るほどの氣を備えているようだ。」という意味であると思います。

幕末から明治の時期に、山岡鉄舟（1836～1888）という剣禅一致を極めた剣豪がいました。幕臣であった鉄舟は、江戸攻略のため東進してきた官軍に、単身、命がけで乗り込み、西郷隆盛と勝海舟の会談のお膳立てをし、江戸無血開城の陰の立て役者となったのです。

その鉄舟が二十八歳の時、浅利又七郎という剣客に試合を挑み敗れ、どれだけ修行を重ねても浅利には勝つことが出来ず、以後浅利の幻影に悩まされる日々を過ごしました。

明治になってもそのトラウマの癒えない鉄舟は、京都天竜寺の滴水宜牧和尚に救いを求めます。この時、滴水和尚は鉄舟に洞山和尚のこの詩を注4公案として与えたのです。

鉄舟はこの公案と剣の修行に血の滲むような努力を重ね、明治十三年ついに滴水和尚から注5印可を受け、同時に浅利又七郎から伊藤一刀齋の夢想流の極意を授けられ、自ら「無刀流」を開いたのです。

この部旗は、田島誠先生が、平成22年3月、草津高校を最後の任地として滋賀県の教員を退職され、鹿児島に帰られるとき、先生が尊敬しておられる妙心僧堂の岫雲軒雪丸令敏老大師に揮毫を頼まれ記念に残されたものです。草津高校剣道部の宝物となる部旗です。

<注1>「冲天氣」を「冲天氣」や「衝天氣」とする資料もある。いずれも「天をつく勢いの氣」の意味。

<注2>洞山和尚の得た境地を五段階に分けて漢詩で説明したもの。その第四段階の「兼中至」を説明した漢詩が「両刃交鋒…」である

<注3>鋒とは古い時代の中国の武器で、左右両方に刃がある

<注4>坐禅修行中に取り組むテーマ

<注5>禅の修行を徹底したという証明

<参照>「山岡鉄舟」(大森曹玄＝春秋社) 「山岡鉄舟 幕末・維新の仕事人」(佐藤寛＝光文社新書) 「禅と武士道 柳生宗矩から山岡鉄舟まで」(渡辺誠＝ベスト新書)